

国際化を担った力士

—高見山大五郎と大砂嵐金崇郎—

佐々木晃彦

1. はじめに— 唯一無二の回教徒 —

2 場所連続優勝した大関大の里が「第 75 代横綱大の里」になりました。初土俵から所要 13 場所での昇進は、年 6 場所制となった 1958 年以降で最速の記録です。大の里は相撲が強いだけではありません。その立派な体で国土安穏や五穀成就の願いを込める横綱土俵入りは、必見の価値があります。これで豊将龍と東西に二人横綱となり、番付のバランスもとれます。一好事家として「大豊時代」を願っております。

幕下取組を TV 観戦して 10 年になります。前日のうちに幕下力士の取り組みを、勝ち負けの星数と一緒に手書きで作成、それを手に相撲を観ます。幕下には毎場所、数名の力士が三段目から上がり、東西に 60 名ずつ計 120 人の力士で構成されています。一場所 15 日の興行が年 6 回あって 90 日。ほぼ休まず観戦していますから、記憶力が怪しくなっておりますが、80%以上の顔と四股名は、まあまあ一致します。

稽古をしているか、体重が増えているか、もちろん、一人ひとりの所作も自然と覚えます。時間をかけて覚えた四股名には愛着があります。四股名は相撲が持つ魅力なのです。でも、せっかくの四股名を変える力士がおります。いろいろな事情があるのでしょうか、あれは困ります。やめて欲しいと思う時があります。そのような場合は前の四股名を強くインプットし、TV 画面に向かってわざと前の四股名で応援します。こちらでも徹底抗戦？です。でも最近の記憶力減退は如何ともし難く、古い四股名は忘れていきます。

大砂嵐金崇郎はエジプト生まれのイスラム教徒。このようなバックグラウンドをもつ力士、相撲界では初めてです。2012 年の 3 月場所に前相撲で初土俵を踏み、5 月場所で序の口に四股名が載って、2013 年 1 月場所には幕下に上がりました。序二段、三段目、幕下と、1 年ずつかけて上がるのが普通と言われる相撲界では、とてつもなく早い出世です。最終的には 2015 年 11 月場所に、西前頭筆頭まで上り詰めました。

角界入りして関取(十両)になれるのは僅か 10%の世界です。このお相撲さんは凄い努力家でした。後にも先にもたった一人、大の里が大関、横綱昇進時の口上で使った言葉を借りれば「唯一無二」の存在である大砂嵐に光を当て、今まで眺めてきた相撲界をたどりたいと思います。

2. 力士との出逢い

私が初めて見たお相撲さんは信夫山(注1)です。小学 1 年生の時に父親に連れられ、

福島に遊びに行きました。その際、新聞やラジオでしか見聞きしたことのないお相さんを福島駅構内で見ましたのです。

相撲界では小柄な力士でも、まだ子供の私には、浴衣姿がお似合いの、大きく、恰好良い関取でした。人待ちなのか、自宅に忘れ物でもしたのか、なぜか落ち着かない様子の信夫山を思い出します。父親に促され、怖じ怖じしながら「サインを下さい」と言う時のドキドキ感。70年以上前のことですが、駅構内での夢体験を心に止めております。

それから約10年後、お相撲さんと接点を持つ機会が訪れます。仙台市の高校を経て1964年に上京しました。東京オリンピックのあった年です。オリンピックで見た競技はただ一つ、無料で見ることのできるマラソンでした。凌ぎやすい日でした。アベベが断トツのトップで走り去った後、円谷幸吉が斜め前に視線を落とし、苦しそうな姿で通り過ぎました。続く3位とは結構な差がありましたから「銀メダルだ」と確信していました。が、競技場で抜かれて銅メダルを獲得…そんな時代です。とにかく好きだったんですねえ、暇を見ては相撲部屋に通いました。

時津風部屋(=双葉山相撲道場)では上り座敷から、大関の北葉山(注2)や豊山(注3)を中心に汗と土にまみれて稽古に励むお相撲さんに目を注ぎました。土俵には親方から厳しい指導の声が飛びます。しかし土俵上では北葉山が稽古相手に、叱責に近い、奮起を促す言葉を浴びせています。お相撲さんの数が多い時代で、一つの土俵周りを二重、三重になって囲んでいます。地位の高い力士が土俵の最前列を占め、後方の、稽古を終えた取的たちは、きっと土俵を見据えて勉強しています。時津風親方(注4)が私の前を通った時は、「この人が、あの・・・双葉山・・・」。にわかファンのミーハーです。



立浪部屋で土俵の中心を占めるのは巨漢の若見山(注5)です。昭和39年初場所に20歳で新入幕、北の富士、清国とともに「若手三羽鳥」と呼ばれている大関候補です。巨体を活かした相撲で得意技は極め出し。富山出身なので「梅ヶ谷」襲名が期待されていました。残念なことに糖尿病を患い、柏鵬時代の脇役に留まりました。若見山の2歳年上に若浪がいました。酒豪で怪力。178センチで103キロの小さい体で、左四つからの寄りと吊りが得意です。

1964年7月、小結に昇進しました。村田英雄の「王将」を歌えばプロ級と有名でした。この二人が立浪部屋を引っ張っていました。親方は元横綱羽黒山(写真下右、注6)。稽古

中は一切声を発しない寡黙な人でした。部屋が変われば雰囲気も様変わりです。



高砂部屋に出掛けた日は、たまたま部屋の土俵開きでした。幕下に上がっていた高見山が全力でぶつかっておりました。対する相手は大鵬(注7)と柏戸(注8)です。

3. 柏鵬時代—高見山の来日—

外国人力士として大砂嵐につながる、一人の力士に触れさせて下さい。高見山大五郎です。1944年生まれですから現在81歳。ハワイから単身来日した外国人初の幕内力士で、最高位は関脇。横綱経験者戦人数16人は歴代1位です。

1962年6月に、大相撲ハワイ興行がありました。初めてのハワイ興行です。団長は高砂部屋の師匠で元横綱の前田山(注9)。興行のプロモーター的な役割を担ったのが力道山です。柏鵬時代の黄金期で、興行には栃ノ海(注10)や清国(注11)も参加しました。2年後の1964年2月、再びハワイ興行が行われました。日系人が多いハワイは相撲熱が盛んです。興行日には余興として、相撲に関心のある少年たちと関取衆の稽古があります。

大鵬に稽古を付けて貰ったのがジェーシー少年、後の高見山大五郎でした。ジェーシーは高校1年頃からハワイの相撲大会で好成績を残しておりました。そこで高砂親方がスカウト、来日しました(注12)。約20年の力士生活が始まります。

大砂嵐の項でも触れますが、一番困ったのが食事。ご飯にケチャップをかけて食べたり、魚が食べられないので部屋の女将さんが肉とキャベツを炒めるなど、特別な処遇を受けました。当時の相撲部屋では、まだ肉が出ていません。肉を食べるのは高見山だけでした。でも、部屋では力士を含む皆が、気遣いを見せる高見山の性格や日々の努力を知っています。部屋全体で高見山を応援し、カバーして3年後の十両昇進につながります。

ジェーシーのいる高砂部屋の稽古風景は、他の部屋と違っていました。師匠前田山の「怪我をさせるなよー」「大切に扱ってくれよー」の大声が部屋に響きます。教えるには寛大さと厳格さの双方が必要と言います。しかし相撲界にある教えには厳格さばかりが目立ちます。「無理偏(むりへん)に拳骨(げんこつ)」と言われる厳しい世界にあって、高見山にだけは細心の配慮がなされていました。

あり得ないことです。その都度、大鵬や柏戸から笑みがこぼれていました。大鵬(写真左)と柏戸(写真右)が稽古を付けている様子を見て下さい。周りの関取衆も土俵に目を凝らしております。両横綱が現在につながる「相撲の国際化」に向けた先鞭役としての高見

山を認め、理解を示し、親方の指示のもと煩勞を厭わず、相撲界全体で大事に育てようと腐心しているのが素人目にも分かります。



高見山は1964年3月場所で前相撲、5月場所(序の口)は6勝1敗、7月場所(序二段)は7勝0敗、9月場所(三段目)は5勝2敗、11月場所(幕下)は5勝2敗と、順調に番付を上げていました。高見山は柏鵬の胸を借りて強くなり、「将来の三役、打倒柏鵬を果たす力士」として、幕下時代には角界期待の存在になっていました。同部屋の前の山(注13)自身、「高見山の土俵姿勢に刺激を受け、稽古に身が入った」と後々に感謝しています。

高砂部屋の屋上に行くと、大鵬と柏戸が一休みしておりました。煙草をくゆらせてリラックスした雰囲気です。「山形から上京しました」と語りかけると、故郷が一緒の柏戸がニコリと微笑みました。柏戸(写真左)は結構なお喋りで、冗談を言っただけで周りを温かい雰囲気包み込みました。対照的に静かな大鵬は、山形訛りでお喋りする私たちの聞き役で、相好を崩すことしばしばです。

穏やかで優しい人でした。その後、再び土俵に降りた際は、カメラを見つめて「スマイル」です(同中、右)。ライバル同士と報道される二人ですが、そこには仲の良い親友の雰囲気が漂っていました。大横綱二人の対応に、「素敵な人たちだなあ」との思いを強くしました。大砂嵐が生まれる28年前の相撲界です。



4. 相撲部屋入りを目指すシャーラン

1992年2月にエジプト・カイロ生まれの、後の大砂嵐ことシャーラン少年。彼は7歳で

空手を、11歳でボディビルを始めています。まだ発育途上で育ち盛り、日本なら小学4〜5年相当の子供が、あの過酷なボディビルに取り組むなど考えられないことです。少年期の自らを「冒険的で攻撃的だった」（注14）と振り返っています。

こんなエピソードがあります。12歳の時、県の空手選手権で侮辱してきた相手選手を殴って骨折させ、道場をやめさせられました。落ち込むシャーランに父は「格闘技は人を傷つけるためにあるのではない」と諭しました。この父の言葉で立ち直ったシャーラン、14歳で知った相撲に高い関心を示したと言いますから、自分のパワーに並々ならぬ自信があり、自ら道を切り開くエネルギーに満ち溢れていたのです。不幸にも持ち前のヤンチャな性格が後々の力任せな相撲の取り口に現れ、怪我に泣かされて休場を繰り返す相撲人生に結び付くのですが。

大砂嵐の生きようを見ていると、その対立軸にある日本の多くの若い人を思ってしまいます。大砂嵐と同世代の中学生は予備校に通い、大学入学までの青春時代をあれこれと面倒を見て貰います。「言うことを素直に聞く」人任せです。しかし、親切に面倒を見てくれるからこそ、そこからの独り歩きが難しくなります。急に「自分の道は自分で見つけなさい」と言われても、それまで皆が同じ形、同じ流れに乗って、やらされてきております。皆と一緒に物事を進めることを善しとしています。従って、良い意味での我儘な行動は消され、経験値の無さが“途方に暮れてしまう方向へ”と導かれるのです。

日比野克彦・東京芸術大学学長の言葉を借りれば、「自分を表現する方法が確立出来ない」のです。偏差値教育は日本が戦後、欧米に追いつくための人材を育てるため、受験教育をスタートさせた過程で生まれたものです。つまり、子どもたちが自ら進んで取り組んでいるのではなく、強制されて勉強しており、入試に合格するというゴールテープを切ると肝心な“その後”が続かないのです。自分を表現する方法や積極性はもちろん、それを裏付け、支える個性が育っていないのです。得意なこと好きなことを持つことは素晴らしいことですが、それを探そうとする大砂嵐の一途な姿勢には美しさがありました。

個人主義の社会では互いの個性や人格を尊重しますが、集団主義の色彩が強い日本の社会は、異質なものを排除しがちです。人は皆、生まれた瞬間から他の人とずれているのが当たり前なのに、何につけ集団の中で落ちこぼれることを恐れさせる教育です。それを信じて疑わない人に見られるのは、大砂嵐と真逆の行動となります。「日本の中学生や高校生には、朗らかさが欠けているように思います」（グレゴリー・クラーク）と指摘する教育家の言葉を付け加えさせて下さい。

シャーランに相撲を取る切掛けを与えたのは、同じボディビルジムに通う体重65キロの青年でした。当時のシャーランは14歳にして筋肉隆々の120キロ。相手の体重はほぼ半分。負けるはずがないと臨んだ7番、それが全敗となったのです。決まり手は、下手投げ、上手投げ、寄り切りが3回、立ち合いの変化が2回。「なぜだ？体重は倍もあって、力も強いのに・・・」。

負けた決まり手を覚えるほど大きなショックを受けました。実は相撲というスポーツは、押し合いの力比べだけではありません。相手のバランスを崩してからの「押し」や

「投げ」が相撲の神髄であり、最も安全な勝ちにつながります。相手のバランスを崩す技とスピードがあれば、小さな力士であっても大きな力士を負かすことが出来るのです。自ら進んで取り組む勉強家の大砂嵐は、「相撲をパワーのスポーツだと思っていたが、パワーをどう機能させるかが大事なんだ」と直ぐ気付きました。

エジプトに柔道で有名な選手はいましたが、アフリカ全域からもイスラム圏からも、未だ力士は出ていません。上昇気流に乗ることを熱望する彼は、「自分が相撲部屋に入門できれば歴史の1ページに載れる」と信じていました。それからのシャーランは角界入りに向け、惜しめない努力を注ぎました。カイロの道場に通い、見よう見まねで相撲と取り組み、2008年は世界ジュニア選手権無差別級で3位、2011年の同選手権重量級でも3位になり、オランダ相撲連盟のコーチの仲立ちがあつて来日に漕ぎつけました。

エジプトから複数の部屋に手紙を送りましたが、唯一返事があつたのは大嶽部屋で、それも入門断りの返事でした。相撲への情熱は高まるばかりです。2011年8月にカイロ大学を休学して来日、各部屋に手あたり次第に手紙を送りました。稽古には参加させて貰いますが、入門につながる色よい返事が届きません。6部屋で体験入門をしますが正式な入門は断られ、決まったのは7部屋目の大嶽部屋でした。「シャーランを見ているうちに、最近の若者にはない、熱いものがあるのに気付いた」「相撲に国籍、人種、宗教は関係ありません」と考える大嶽親方(元十両の大竜)の眼に留まり、入門が許可されました。大嶽部屋は大鵬が起こした部屋ですから、これでシャーランは大鵬の孫弟子になったのです。

5. 大砂嵐の誕生—大嶽部屋に入門—

2011年以降も外国人への入門を閉ざして憚らない部屋がありました。そのような中で大嶽親方は、「外国の文化や社会を学び異文化を理解することは、互いの相違点を把握した上で相手の自立や独立を尊重すること」と考えていました。「違いは違い」と認め合う姿勢を持ちながら力士を育成する、角界では稀な考えを有する師匠でした。個性を活かす道を開く力こそが真の実力であり、「何をやりたいか」が認められて意欲が発揮されること、それをシャーランは短期間で示します(注15)。

2012年5月場所、西序の口5枚目に四股名が初めて載りました。その由来は本名の一部、シャーランの「シャ=砂」と「ラン=嵐」の当て字に、大嶽親方の四股名である大竜から「大」を貰って頭に付けたもの、力士・大砂嵐の誕生です。その場所は7戦全勝で優勝します。

しかし、場所中にラマダンを迎えることがあります。イスラム教徒は日の出から日没にかけて、一切の食事を断つことで空腹や自己犠牲を経験し、飢えた人や平等への共感を育むことを大切にします。苦しい経験を分かち合うことで、イスラム教徒同士の連帯感が深まり、多くの寄付や施しにつながります。ラマダン時には何よりも優先させて祈る姿を、半世紀以上前になりますが、モーリタニアに住んでいた折り見ております。例えば船上でメッカに向かってする礼拝ですが、船が旋回すれば自分の体をメッカに向けて移動させ、祈り続ける徹底ぶりです。フォークリフトで漁獲物を接岸した氷蔵船から冷凍庫に搬入する作業、その冷凍庫内における漁獲物の選別作業・・・全てを止めて祈ります。

改めてイスラム教徒が力士になると生じる課題を挙げます。

- 豚肉やその副産物、アルコールを含む食品の禁止
- 一日5回の礼拝(サラート)
- 腰から膝までを他人に見せることの禁止
- ラマダンにおける日中時間帯の断食

大砂嵐と大嶽部屋は、日没後に焼き肉を15人前平らげる、豚肉・アルコール抜きの高カロリー「ちゃんこ鍋」を食べるなど、様々な工夫を凝らしました。

2013年1月場所で幕下に上がると部屋頭になりました。大鵬からは「俺の目の届くうちに関取になって欲しい」と言われていました。しかし大鵬は、1月19日に急死、約束を果たせなかった大砂嵐は泣き濡れました。同年5月場所に東幕下7枚目で7戦全勝の優勝、5月29日の番付編成会議で十両昇進が決まりました。翌7月場所で関取として初めての土俵を務め、ここで大鵬の期待に応えることができました。

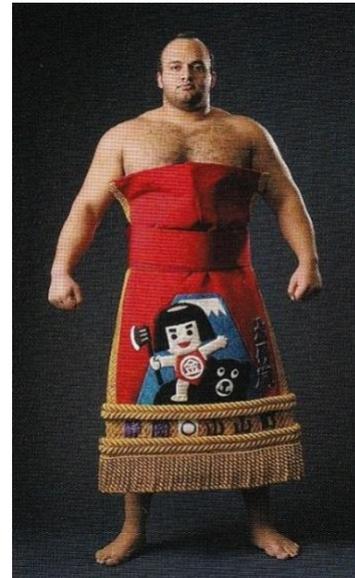
この昇進ですが、3月場所で幕下格付け出しでデビューした遠藤と一緒にしました。十両では7月、9月と2場所連続で10勝5敗の好成績を挙げ、晴れて11月場所で新入幕を果たしました。12月には東京外国語大学の教壇に立ち、アラビア語専攻の学生を対象に特別講義を行っています。カイロ大学で「経営学」と「会計学」を学んでいた大砂嵐には久しぶりの大学が教壇となりました。土俵の外でもコミュニケーション能力の高さを示す講義は、東京外大の教員にも評価が高く、このエジプトを代表しての〈外交官〉ぶり、そう簡単にできることではありません。

番付に名前が載って一度も負け越しのない、外国出身者では元大関琴欧州を抜く最速のスピード出世でした。前年5月の春場所初土俵から所要わずか10場所目。大いに称賛されましたが、相撲内容はボディビルで鍛えた189センチ、160キロの体を使った、力でねじ伏せる並外れのパワーに依拠しておりました。体の硬さ、腰高な仕切り、外から振り回す張り手には、隙も見られたのです。

2014年3月場所に大銀杏が結えるようになりました。しかし地毛では結えなかったので、付け毛で間に合わせました。7月場所5日目には横綱初挑戦で、鶴竜をすくい投げで破り金星を挙げました。土俵に叩きつけた豪快なすくい投げは、大砂嵐のパワーが鶴竜の巧さを打ち砕いたことを示しました。(写真右は公益財団法人日本相撲協会発表)。

初土俵から15場所目での金星は、14場所の小錦に次ぐ2番目の早さ(幕下付け出しを除く)でした。これだけでは終わりません。6日目は横綱日馬富士を引き落としで土俵に這わせたのです。横綱初挑戦から2日連続の金星獲得は、15日制が定着した1949年夏場所以来初めてでした。

初土俵からわずか2年、大砂嵐は初のアフリカ出身力士として「ひのき舞台」に立って



いました(写真下は時事通信社)。全世界から注目され、インタビューはカナダ、フランス、ドイツ、イギリスなど各国から舞い込みました。映画「キング・オブ・エジプト」(製作：アメリカ、2016年9月公開)では洋画の吹き替え声優に挑戦。現役力士が吹き替え声優を務めるのも、今までないことでした。

ストーリーは人間と神々が共存しているとの設定で、舞台は古代エジプト。神々の争いに巻き込まれた人間の青年が、奪われた恋人を蘇らせようと奮闘する姿を描いたものです。スフィンクス役の大砂嵐は「相撲の取組より緊張した」と語っていますが、前述の大学での講義といい、声優の仕事といい、新しいことに挑戦して領域を切り開いていく姿勢は圧巻で、もう立派としか言いようがありません(注16)。



6. もぐさ会

小椋庸光は文京区根津に医院を構える針灸の先生。俳優の金田龍之介(通称：金龍)が、平幹二郎主演の「王女メディア」ギリシア公演(1984)後にパリに立ち寄りました。その際、拙宅の壁に貼り付けていた相撲の番付を見て、「相撲が好きなら『もぐさ会』に入りませんか」と誘って戴いた。もぐさ会は小椋庸光を囲む会。俳優は体に不調があっても余程のことでない限り、その日の舞台に穴を開ける訳には参りません。薬を飲んで治そうなどと悠長に構えることもできません。舞台がある限り、そこに立ち続けなければなりません。お相撲さんも置かれている状況は一緒です。そこで頼りにするのが鍼灸です。

金龍にお会いした翌年、フランスから帰国した私は、早速、もぐさ会に参加しました。年3～4回ほど集まっては飲み、取り留めのない雑談を交わす仲間です。



メンバーは小椋を含めて17名おりました。故郷山形県小国町出身の高島勝紀(元幕内の神幸)、「起重機」の異名で呼ばれていた浅香山博光(元小結青葉山)、それに現NHK専属解

説者の尾車浩一(元大関琴風)、この元関取に加え、35代立行司の木村庄之助になる前の木村城之助、1979年～1983年頃タイトルマッチを戦い、通算10度の防衛を果たした元日本スーパーバンタム級チャンピオンの岩本弘行、全日本ライト級新人王の杉永正など元プロボクサー、そして、中村玉緒、大前均などの俳優もいました。大前の大柄で、髪を剃り落とし、海坊主のような強面でプロレスラー並みの圧倒的容貌・・・。愉快的集いでした。

1月、5月、9月の東京場所は、千秋楽の打ち上げが各部屋であります。私は高見山と同時代に活躍していた浅香山親方の誘いで、一緒に朝稽古を見ておりました。かような縁もあり、打ち上げは東京・本郷の木瀬部屋にお邪魔していました。



木瀬、浅香山・両親方夫妻との交友を切掛けに、我が家に若いお相撲さんが来るようになりました。浅香山親方からは、「部屋から逃げた弟子を部屋に連れ戻して欲しい」と依頼を受けたり、尾車親方と新弟子の勧誘に出掛けたり・・・いろいろな経験が重なり、少しずつ角界を知ることになります。

昔から人気の高い大相撲です。年によって多少の違いがありますが、現在の年間観客動員数は本場所だけで約90万人、巡業やトーナメントを加えると120万人を超えます。大相撲を支える中心は力士ですが、年寄、行司、呼出、床山、若頭、それに協会職員を加えると約300人が土俵を支える公益財団法人で、事業規模は約140～150億円です(注17)。

ある日のこと、『相撲』編集部から掻き立てるような？執筆依頼の電話が入りました。唐突に流れを変えて恐縮ですが、異なる視点から相撲界を眺めるために、拙文の転載を、どうか御容赦下さい。

7. [連載] ◎リレー相撲エッセイ

第54回 触れ太鼓

『相撲』編集部から「相撲は『経済学』や『経営学』とは関係ないんでしょうね。大相撲と漫才の接点(筆者注：1999年7月31日、新宿末広亭で師匠ローカル岡と組み、ローカル晃彦で漫才師デビュー。ボーイズバラエティー協会所属)も考えられませんし」。そんなに冷たく挑発されると、つい「何とか致しあっしょ！」な～んてサービス精神がもたげ

☆経済合理性(economic rationality)

背の高い人も低い人も、太った人も細い人も、ハンデイ・ゼロで戦う相撲って、ボクシングや柔道にはない魅力がありますよ。その魅力は、小さいお相撲さん、痩せたお相撲さんの創意工夫にあると思うんです。小型のお相撲さんがデッカイお相撲さんと真面にエネルギーのぶつかり合いっこをしては吹き飛ばされ、土俵からオチこぼれてしまう。これだけは避けなければなりません。

最小のエネルギー(コスト)で最大の勝ち星(成果)を上げようとする相撲(行為)があるとしたら、これは、まさしく、経済合理的なやり方です。経済における合理性と非合理性の思考を示してくれるのが非凡な超能力の持ち主、舞の海と智の花の“カリスマ”相撲。

経済合理性は経済の基本原則。だって「最大の努力で最小の成果を上げよう」な～んて人、滅多なことでお目にかかれませぬ。最小のエネルギー消費で格好良い勝ち名乗りを受けた時、勝は価値(value)をもたらし、効率性という概念が成立するってことになる。

☆損益分岐点(break even point)

損益って損失と利益、いわゆる損得勘定です。事業成績を見るために、決算期末に元帳に設けられる集合勘定です。これは解説者が、「星勘定が・・・」なんて言うのと、どっか、似通っている。場所の成績を見るため、私たちは元帳ならぬ星取表を眺めます。千秋楽を終えた星取表ですが、その勝星が幕下までは4番か3番か、十両からは8番か7番かでは立場がぜ～んぜん違ってきます。

その損益発生の分かれ目になるのが損益分岐「点」、point、ポイントです。この、どちらかに転ぶか分からない点を境目に、天国と地獄があります。タニマチが付いて、博多の美味しい魚でお酒なんかをご馳走して貰い、そこから中州に繰り出すか、それとも部屋に戻って青汁を一人さみしく飲むかでは大違い。突き詰めれば、ちょっとしたサジ加減が分かれ目になったりして、「あんなに稽古を積んだのに、ウウッ、チックショー」な～んてことがあるかも。

☆方法的懷疑(methodical doubt)

そこでだ、「今までの稽古で良かったの?」「食事の取り方には問題がなかったの?」な～んて、それまで自分が考え、あるいは親方から教を乞いながら受け入れてきた全てを疑ってかかるのも、一つのやり方ではありますよね。それは、いい加減な疑いではいけません。いい加減な疑いは、ナンモもたらしませ～ん。徹底して疑う。徹底して。

ここは何処なのか?存在している私とは何か?宇宙とは何か?世界とは?日本とは?相撲とは?その相撲と関わっている私とは何か?私と宇宙を行きつ戻りつしながら、この基本的なことに答えることのできる意識の基に到達したお相撲さんは、スゴク強いんだろうなあ、などと勝手に考えたわけ。

もちろん、対象になるのはお相撲さんだけじゃ～ござ～ませぬ。相撲好きで、このリレー相撲エッセイ「触れ太鼓」を読んでいるあなたも、方法的懷疑で新しい「私」を発見する可能性はあります。その場合、参考書としては、デカルトの『方法叙説』なんかがお薦め。

☆ノマディズム(nomadism)

「近代を越えるべき思想は、遊牧民的思想でなければならない」これはフランスの哲学

者ジル・ドゥルーズ(1925～1995)と、精神分析学者、フェリックス・ガタリ(1930～1992)が語ったことですけれどね。ノマド(nomad)って遊牧民のことです。

サハラ砂漠は、このワチキが青春時代の4年を遊牧民と過ごし、結婚式まで挙げた地ですー。だから「不動の拠点を中心に、すきあらば領土拡大を図り、財を高く積み上げようとする定住民的思想が近代社会を疲弊させた」とする考えには納得いくんだよね。

あり得べき真の豊かな社会をつくるには、新しいオアシスを求めて動くこと。決まった場所での生産や蓄積を離れながら、「いま」の「ここ」を大切にすること。これって、東京、名古屋、大阪、九州を遊牧する、相撲社会と符合すると思うんですけど。

新年の東京場所から11月の九州場所まで、新たな気持ちでオアシス、ならぬ場所を迎える。ひたすら美味しい水(白星)を求めて。素敵な思い出はアンドレ・クレージュデザインの風呂敷に包みこみ、来るべき場所に備える。アーア、相撲っていいな。(以上、第54回リレー相撲エッセイ【触れ太鼓】『相撲』ベースボールマガジン社1999.12.から転載)。

8. お相撲さんにも気分転換が・・・

金龍の誘いで「もぐさ会」に潜り込みました。前項で触れましたが、高校時代に柔道部に所属し、練習で私が通っていた高校まで走っていたという浅香山親方(元小結青葉山)、彼とは年齢も近く、千秋楽の打ち上げは文京区にあった浅香山が所属する木瀬部屋に行きました。新しい取的が期待され、相撲界に入っては消える・・・そんな様子も日常的に伺い知ることができました。

我が家にお相撲さんが参りますと、買い出しを一緒にして彼らがつくる「ちゃんこ鍋」を戴いたり、子供の運動会を楽しんだり、ファミコンゲーム、マージャンを簡略化したドンジャラなどで遊んでおります。まあ家族が増えたようなものです。「木瀬親方は元気ですか？」と伺うと、お相撲さんのトーンが急に変わり、「それだけは言わないで下さい！親方の顔を忘れるために来ているんですから」。「ああそうか、配慮が足りなかったなあ」と私は大反省です。以来、お相撲さんの前では親方の名前を封じております。

11月の九州場所では千秋楽を終えても怪我の治療があり、お相撲さんが博多に残る場合があります。そのような時は気分転換に電車で北九州に来て貰い、私が勤める大学の、法人事務局席に座って大学職員の疑似体験、グラウンドでラグビーやサッカーの練習を見学



して学生気分、夜は同僚先生のご自宅を伺って夕食、そこから夜の街にチョットだけ顔を出し、私の家に一泊して博多に戻る・・・なんてこともありました。

お相撲さんは外泊ができません。そこで私から医者に連絡、例外的に認めて戴いておりました。出版社にも行ったり・・・こうして相撲の世界に閉じ籠ることなく、機会を見ては外の世界に触れるよう促しておりました。

力士を経済的に支援する人をタニマチ(注18)と言いますが、私は「一日2食にありつけ、眠る3畳間があればあとは付録」をモットーとしております。質素な生活を善しとする私との関わりでは、数千万円のご祝儀を集めたり、一晩に数百万円散財して飲み食いなどをするなどとはとてもとても。言い過ぎも言い過ぎ、まあ無理を承知の上で申し上げれば、精神的タニマチということ許して戴けますでしょうか。

9. おわりに

イスラム教では挫折、苦しみを価値あるものとして賞賛します。あらゆる難題に対する心の準備ができていて、失敗も成功も冷静に受け止めます。この強靱な精神力を保ち続けるバックボーンとなるのが宗教です。

エジプトのナイル川に沿った横穴にある壁面に、紀元前500年頃の相撲によく似た競技の絵が数多く描かれています。その壁面から飛び出すように来日した大砂嵐は、自分の人生を自分で選択し、小さな芽を圧倒的な速さで巨木に育てました。新しい挑戦を試みる人は“非常識”と思われる世界に飛び込む人です。そして新しい世界を切り開きながら生きてきたのが大砂嵐です。

人には幸せを感じる四つの因子(注19)があり、その一つに「やってみよう」因子があります。夢や目標、やりがいを持ち、本当になりたい自分を目指し成長する。その過程で幸せを感じる人が持つ因子です。失敗は避けられませんが、そこでまた挑戦する勇気の備わっている人です。

大砂嵐は現役在位36場所の力士生活を通し、「そもそも一生は曲がり角の連続であって、何も恐れることはない」ことを示してくれました。大砂嵐が1勝することに真っ向勝負を掛け、困難を克服しようと努力してきたことに敬意を表し、相撲界に残した記録を記します。
(文中の敬称略)

通算成績：238勝 178敗 53休 勝率.572
幕内成績：112勝 100敗 43休 勝率.528
十両成績：84勝 72敗 9休 勝率.538
現役在位：36場所
幕内在位：17場所
十両在位：11場所

十両、幕下、序の口優勝：各1回

三賞：金星：3個
日馬富士：2個、鶴竜：1個
(記録：公益財団法人日本相撲協会)

【注】

(注1)信夫山治貞(1925～1977、177センチ、109キロ。最高位：関脇)。研究熱心で基本に忠実な相撲を取り、技能賞獲得の常連(6個)だった。もろ差し、寄りを得意とし、「容姿がジョン・ウェインに似ている」と、若い女性に人気があった。金星が7個(東富士10個、鏡里と吉葉山2個、若乃花と朝潮1個)。10勝以上した力士は、松登16勝、潮錦14勝、北の洋と時津山13勝、双ツ龍12勝、大内山10勝。腰痛の悪化で椎間板ヘルニアに罹り1960年に引退。

(注2)北葉山英俊(1935～2010、173センチ、119キロ。最高位：大関)。両親から角界入りの許可が出そうになく、1954年に家出同然に北海道から上京。四股名は“北”海道と双“葉山”に因んで北葉山とした。体は小さかったが、執念と粘り強い強さで乏しい素質を補った。1966年に引退したが、大関在位30場所は、当時の史上1位。大鵬との対戦で10勝以上挙げたのは、柏戸(16勝)と北葉山(11勝)の二人しかいない。村田英雄の「男の土俵」作詞のモデルに。

(注3)豊山勝男(1937～、189センチ、137キロ、最高位：大関)。母子家庭に育ち、文武両道に励んだ力士。高校時代は野球と陸上で活躍。相撲は大学入学後に始めたが、4年次に学生横綱となり、1961年に時津風部屋から幕下10枚目格付け出しで初土俵。恵まれた体で1963年に、幕内所要7場所で大学卒初の大関になった。大関数在位34場所は当時の史上1位。美術の腕を磨き、2015年の「第66回一線展」に大作「屋久島」を出品。第8代日本相撲協会理事長。

(注4)双葉山定次(1912～1968、179センチ、122キロ。最高位：横綱)69連勝の記録を樹立し、不世出の横綱、相撲の神様とも呼ばれて国民的人気を得た。横綱在位中に双葉山相撲道場を創立。親方となり、時津風一門を形成した。鏡里を横綱に、大内山、北葉山、豊山を大関に育てた。第3代日本相撲協会理事長として、①相撲協会構成員(年寄、行司など)の65歳定年制の実施、②部屋別総当たり制の実施、③相撲茶屋の再編と法人化など、運営の改善に取り組んだ。

(注5)若見山幸平(1943～没年不明、177センチ、176キロ。最高位：関脇)。身長・体重がほぼ一緒のドッシリした体は角界でも目立った。14歳で入門、1957年に初土俵を踏み、序の口を飛び越して序二段に付いた。北の富士や清国とともに「若手三羽鳥」と呼ばれ将来を囑望されていた。しかし大鵬との一番で膝を痛め、大成を阻まれて1969年に26歳で引退した。恵まれた体格と才能を持ちながら怪我と病気に苦しみ、そのポテンシャルを発揮出来なかった。

(注6)羽黒山政司(1914～1969、179センチ、116キロ、最高位：横綱)。双葉山と同時期に活躍した。第二次世界大戦の敗戦を機に双葉山が引退すると、名実ともに第一人者として相撲界を支えた。1945年11月場所から4連覇・32連勝したが、その間に立浪の娘だった妻と長男を相次いで亡くした。戦時中の食糧難で体重が90キロ台に落ちるなどの苦難も続いた。後進の育成に熱心で、時津山、安念山、若羽黒、北の洋の「立浪四天皇」を育てた。

(注7)大鵬幸喜(1940～2013、187センチ、153キロ。最高位：横綱)。父はウクライナ人で母は日本人の納谷キヨ。出生地はロシア・サハリン州ポロナISK市で、出生名はイヴァーン・マ

ルキャノビッチ・ポリシコ。当時の南樺太は日本領のため、大鵬は外国出身横綱にはならない。大関2場所連続優勝で横綱昇進を果たした初めての力士。1961年に柏戸と揃って横綱に昇進したが、その後、柏戸に休場が増えた。その結果、大鵬の一人勝ちが続いて観客が減り、大鵬の全盛期が相撲人気の低迷期を呼んだのは不幸であった。

(注8) 柏戸剛(1938～1996、188センチ、146キロ。最高位：横綱)。1954年の蔵前国技館落成の場所に初土俵を踏んだ。入門時から「伊勢ノ海部屋の富樫」は有名で、1957年11月場所で新十両、1958年9月場所で新入幕を果たした。若秩父、豊ノ海とともに「ハイティーン・トリオ」と呼ばれた。柏戸が大鵬と同時横綱昇進を果たした背景に、関脇に上がってから若乃花に4連勝、朝潮に5連勝するなど彼らを圧倒する一方で、若乃花、朝潮の両横綱に衰えがあった。1969年7月場所で引退、独立して鏡山部屋を創立。小沼や多賀竜を育てた。

(注9) 前田山英五郎(1914～1971、181センチ、118キロ。最高位：横綱)。1928年に高砂一行が高知巡業の際、体格が良かったことから高砂自ら勧誘した。1929年の入門当初から性格が粗暴で、関取昇進時に誰も化粧回しを贈らなかった。酒に酔って騒動を起こしては脱走する繰り返しに、高砂は3度破門を言い渡している。1938年1月場所当時、大関は36歳の鏡岩一人で成績も5勝8敗だった。その場所、小結前田山は11勝2敗の好成績を挙げ、関脇を飛ばして大関昇進を果たした。弟子の育成手腕が高く、朝潮太郎を横綱に、前の山太郎を大関に育てた。

(注10) 栃ノ海晃嘉(1938～2021、177センチ、108キロ。最高位：横綱)。新弟子検査で72キロしかなく、家族から入門を反対された。1955年9月場所初土俵、精進して1959年1月場所に十両、1960年3月場所で入幕を果たすが、体重は80キロ程度であった。1962年5月場所に幕内最高優勝を果たし、兄弟子の栃光と大関に昇進。同部屋から2人同時昇進は、この組み合わせを最後に出していない。横綱時代はプレッシャーで、寝つきにアルコールが欠かせなかった。

(注11) 清国勝雄(1941～、182センチ、133キロ。最高位：大関)。同郷の元横綱・照国の勧誘を受け、夏休み中の体験入門を経て1956年初土俵。同期に大鵬がいた。素質は十分も“一日おき”がお決まりの稽古嫌い。しかし後輩の浅瀬川が先に十両昇進して発奮。1965年5月場所に十両昇進。1969年5月の12勝3敗で場所後、大関に昇進した。1985年8月12日に、妻、長男、長女を日本航空123便墜落事故で失うなど様々な災難に遭遇した力士生活でもあった。

(注12) 床寿(文：武田葉月)『大銀杏を結びながら―特等床山・床寿の流儀―』(PHP)に、高砂部屋床山生活50年の仕事、部屋の高見山、小錦、朝青龍など外国人力士の苦悩、そして前田山師匠について詳述。

(注13) 前の山太郎(1945～2021、186センチ、133キロ、最高位：大関)。礼儀や上下関係に厳しい高砂部屋の環境に苦勞し、取的時代は合計7回も部屋から逃げては戻ることを繰り返した。1965年11月場所で新十両、1966年9月場所で新入幕、1970年9月場所に大関昇進を果たした。他方、1972年の対琴桜戦を無気力相撲として注意されている。1974年に現役を引退、部屋から独立して高田川部屋を新設し、前乃森、剣晃、鬼雷砲を育てた。

(注14)アラブ世界は砂漠が多く、砂漠は無慈悲で冷酷、よそよそしく、厳しく、反抗的だ。砂漠の足跡には荒々しさ、反抗、防御の跡が見られ、事実、人々は攻撃と名誉のため戦ってきた。元々アラブ人の強烈な特性は、失敗、汚名に対する攻撃的な点にあり、これはアラブの伝統的な聖戦(ジハード)の呼びかけに影響されたところが大きい。サニア・ハマディ、笠原佳雄訳「争いを生む風土・その戦闘性」『アラブ人の気質と性格』サイマル出版会、pp. 25～ 28。

(注15)相撲部屋入りを目指すシャーランの項は、「エジプト出身の大砂嵐が全勝優勝 幕下は寺下が制す」スポニチ、2012年5月18日。「アフリカ出身『歴史つくる』大相撲・大砂嵐(上)」日本経済新聞、2014年1月18日。「稽古も生活も、ぐんぐん吸収 大相撲・大砂嵐(下)」同上。2013年5月24日。「ピラミッドで活力注入—エジプト出身大砂嵐関、躍進誓う—」時事通信、2013年8月14日。「大砂嵐：ロバが台車を引く故郷 ナイルに育つ」毎日新聞、2013年6月21日ほかを参照。

(注16)大砂嵐の誕生—大嶽部屋入門—の項は、Buzz Feed News、2016年7月9日。「大砂嵐 12日目から再出場へ 右脚痛め休場」MSN産経ニュース、2014年3月19日。「金太郎誕生の地から大砂嵐に化粧回し」朝日新聞、2014年2月5日。「大砂嵐 ラマダン中に初金星へ挑戦」日刊スポーツ、2014年7月1日。「大砂嵐が連日の金星」毎日新聞、2014年7月27日。「大砂嵐が十両優勝！母国で入院中の父のため『勝つしかない』」毎日新聞、2016年3月27日ほかを参照。

(注17)日本相撲協会の決算状況は概ね：事業収入が140億円で、収入内訳は本場所収入102億円、巡業収入31億円で、そのうち入場料収入が70億円。支出内訳は事業費97億円、年寄りや職員の人件費等管理費30億円。事業費の内訳は、巡業経費25億円、力士、行司、若頭、世話人、呼び出し、床山、横綱・大関・三役手当、養成員場所手当などの給料手当20億円、本場所経費18億円、力士の養成関係費15億円である。日本相撲協会提供の決算状況、損益計算書の詳細は、大鋸順『スポーツの文化経済学』（芙蓉書房出版）pp. 100～102。

(注18)元々は相撲界で鬨(ひいき)にしてくれる人、後援してくれる人のこと。例えば、関取の化粧回しは100万円から150万円が相場と言われ、他に食事会、祝賀会、後援会会費などで年間数千万円の費用がかかる。後見人的な立場となる「たにまち」の活動は、不祥事処理など多岐にわたる。最近は個人後援会やファンクラブの台頭で、慣例の「たにまち」的行為は少なくなっている。「たにまち」の言葉は、歌舞伎、宝塚など芸能界でも使うようになっている。

(注19)元来、幸せに影響を与える要素として、SDGsの観点からwell-beingが注目されており、Carrer well-being、Social well-being、Community well-being、Physical well-being、Financial well-beingの5つの構成要素が指摘されてきた(米・ギャラップ社)。近年日本では、自己実現と成長を促す「やってみよう因子」、多様な繋がりや感謝の気持ちを表す「ありがとう因子」、楽観的で前向き、ポジティブに捉える「なんとかなる因子」、自分らしさを探し・求め、他人との比較ではなく自分自身の価値観に従って生きる「ありのまま因子」が支持されている(提唱者は前野隆司：組織心理学)。

【プロフィール】九州 21 世紀委員会委員, (財)芳賀教育文化振興財団ボランティア顕彰委員会委員, 文化経済学会<日本>理事などを歴任。編著書に『東アジアの現状と課題』中国・科学文献出版社, 『演劇マネジメント』韓国・現代美術社, 『B&G 指導者養成テキスト—地域の経営—』(財)ブルーシー・アンド・グリーンランド財団, 『日本の自画像』(財)全日本社会教育連合会ほか。台北芸術大学大学院招聘教授, 明智大学大学院(韓国)招聘教授。九州共立大学名誉教授。